AIR COMBAT II
エアーコンバットII
シナリオ集 vol.2
USER'S MANUAL
PC-9800シリーズ
SystemSoft

AIR COMBAT II
エアーコンバットII
シナリオ集vol.2

はじめに

このたびは「エアーコンバットIIシナリオ集vol.2」をお買い上げいただきましてありがとうございました。

本シナリオ集ではすべて歴史的な舞台が取り上げられています。ジェット機による史上初の空戦が行われた朝鮮戦争、F-4とMiG-21の死闘が繰り広げられたベトナム戦争など完全に史実に基づいたものから、真珠湾攻撃に現代のF-14が登場したらというIF物や、近未来の日米の再決戦シナリオなど8本が収録されています。

またユーザーの選択できる機体はF-14、Su-27kといった最新鋭の物から、MiG-15やF-86セイバーといったジェット初期の名機、旧日本海軍の夢見た「震電」などが収録されています。

歴史が繰り返すかどうかはあなたの腕にかかっています!

目　次

製品の概要

お買い上げ頂いた「エアーコンバットIIシナリオ集 vol.2」には以下の物が入っています。

- エアーコンバットIIシナリオ集 vol.2 シナリオディスク　1枚
- エアーコンバットIIシナリオ集 vol.2 ユーザーズマニュアル　1冊
- アンケートハガキ／ソフトウェア保証書　1枚

●エアーコンバットIIシナリオ集 vol.2は以下の機種で使用できます。

PC-9801VF/VM/VX/RA/RS/RX/DA/DS/DX
PC-9801UV/UX/UR/UF/LV/CV/ES/EX
PC-9801N/NV/NS
PC-98DO/DO+

●同一メディアの「エアーコンバットII」が必要です。

●2ドライブ必要です。

●本製品はハードディスクでは使用できません。

※ NEC純正のディスクユニット及び周辺機器以外が接続されていると，正常に動作しない場合があります。

※この製品の仕様は，機能・性能の改善のため将来予告なしに変更する場合があります。

シナリオ集での遊び方

この「エアーコンバットIIシナリオ集 vol.2」で遊ぶ場合には、「エアーコンバットII」のゲームディスク2の代わりに「エアーコンバットIIシナリオ集 vol.2シナリオディスク」を使用してゲームを起動してください。起動の詳細は本体のマニュアルを参照してください。

ゲームを起動すると今までと同様の初期メニューが現れます。初期メニューで「フライトゲーム」を選択すると以下の8種類のシナリオ（各初級・中級・上級）が選択できます。

秒読みの最後	**鋼鉄の砂塵**
運命の5分間	**フォークランドは僕らの島だ**
月と星の下に	**A−10ラストミッション**
轟雷作戦	**陽はまた昇る**

ミッションの詳細は次ページ以降のミッション解説を参照してください。

※今回収録された機体は以下の15種類です。

F-14トムキャット	Su-37	MiG-21フィッシュベッド
F-15ストライクイーグル	震電	シュペルエタンダール
YF-22ライトニングII	F-86セイバー	ミラージュIII
Su-27k フランカー	MiG-15ファゴット	A-10サンダーボルトII
MiG-25フォックスバット	F-4ファントム	FSX

※機体の選択によってはコンプリートの不可能なミッションもあるので、選択の際には十分に注意が必要です。収録機体の詳細については18ページ以降の収録機体解説を参照してください。

シナリオ解説

ミッション１　秒読みの最後

この数日間、アメリカの原子力空母ニミッツはハワイのオアフ島近海で飛行訓練を行っていた。

F-14が飛び交い離発着を繰り返す。一見したところは当たり前の訓練光景であった。しかしよく注意して見ればF-14は奇妙なパターンで飛行していた。ニミッツを中心にして数機が同心円状に旋回している。実は訓練とはカモフラージュで、ニミッツは強力な電磁波によるレーダー妨害の実験を行っていたのである。F-14の役割は実験の観測であった。

以前、第二次世界大戦中にもフィラデルフィアで同種の実験が行われている。その時は実験艦が一時消滅するという理解不能な現象が生じ、この種の実験は禁止されてしまった。

しかし戦闘機のステルス化が進む中、艦船にもステルス化への動きが見られるようになってきた。消滅現象を制御できれば完璧なステルス艦を造れるかもしれない。米軍は再び実験すると決定した。

今日は最大出力での実験が行われる。

ニミッツの原子炉が膨大な電力を実験プラントに供給し、電磁波で周囲を包み込む。秒読みが進み、コンピュータが電磁波の出力を少しずつ上げていく。

F-14のパイロットたちは、出力増大に呼応してニミッツの姿が透けていくのを見て驚嘆した。次に自分たちの姿までが透けつつあることに気付いて驚愕した。体がこの世から消滅していく。魂だけになるのはどんな気分かをパイロットたちは理解した。半ば以上が宙に溶け込んだF-14は次々にコントロールを失い、あらぬ方向へと飛んでいく。そして秒読みの最後が来た・・・。

太陽が優しく照らす海は静かに凪いでいる。油一つ浮いていない。何事もなかったかのように空を鳥が舞っている。ニミッツやF-14がいたという痕跡は何も残っていなかった。現代には。

1941年11月26日、択捉島単冠湾から連合艦隊が出撃した。真珠湾奇襲を目的とする、日本の全主力空母を動員した一大作戦だ。

連合艦隊は存在を厳重に秘匿しつつ東進した。12月２日に「新高山登れ、一二〇八」との電報を受け攻撃期日を12月８日に決定、そして無事期日前にハワイのオアフ島近海に到着した。

ニミッツの艦長は意識を取り戻した。艦はこの世に帰ってきていた。周囲は実験前と同じ海に見える。多少天気が違ってみえるのは、まだ目の調子が回復していないのだろう。レーダーには飛行状態を回復しようと必死な状態のF-14が映っている。実験前と機数が合わない。数機が墜落したようだった。通信士が驚きの声を上げた。「トラ・トラ・トラ」と叫ぶ通信を傍受したと艦長に報告する。レーダーが百機以上の大編隊をキャッチした。何事が起きたのかを理解するよりも、まず艦長は軍事的に対処することにした。

◆推奨機体　F-14

今まさに真珠湾攻撃が始まろうとしているハワイにF-14はタイムスリップした。

●F-14で出撃して零戦を撃墜せよ。

第一次攻撃隊の侵攻をキャッチしたニミッツは、F-14部隊に迎撃を命令した。

●日本軍攻撃隊を迎撃せよ。

すでに攻撃を受けて火の手が上がっている湾内の戦艦を救援すべく、ニミッツは急行した。

●日本軍の対艦攻撃を阻止せよ。

◎アドバイス
旋回性能では零戦にかなわない。ジェットエンジンの大パワーを生かして、一撃離脱型の戦闘をするのだ。上昇してくる零戦を高高度から迎え撃つ戦法が最も有効だろう。ミサイルはジェット機を対象として開発されているので、MRAやLRAは零戦に当たらな

い。機銃と SRA で勝負せよ。

ミッション2　運命の5分間

日本軍の南方攻略作戦は予想より順調に進んだ。日本軍の維持能力を越えるペースで補給線は延びていき、薄く広がった戦力は弱体化した。米軍の奇襲を大本営は危惧した。おりしも米機動部隊が帝都を爆撃した。損害は小さかったが、大本営に与えた精神的ショックは大きかった。

かくて米軍の前進基地であるミッドウェイ島の攻略作戦が発動した。だが真珠湾攻撃と違い作戦内容は米軍に筒抜けであった。暗号が解読されているだけではなく、情報の秘匿自体がまともになされていなかった。一般国民ですらミッドウェイを攻撃すると知っていた。さらに真珠湾攻撃で航空機の戦艦に対する優勢を確立したにも関わらず、海軍は大艦巨砲主義に固執していた。戦艦部隊に兵力を割き、空母部隊には存分な直衛艦が配備されなかった。連合艦隊の総力を結集したはずのミッドウェイ攻略作戦は欠陥だらけだった。

1942年6月5日、南雲忠一長官率いる機動部隊はミッドウェイ島攻撃隊を発進させた。続けて第二次攻撃隊の出撃を命じ対地攻撃用の爆弾を装備させた。しかし索敵機が米機動部隊を発見した。南雲長官は爆弾装備を対艦攻撃用の魚雷に変更するように命じた。これは数時間を要する作業だ。そこに低空から米雷撃機が殺到してきた。零戦が迎撃し、雷撃機は叩き落とされた。戦闘終了後、零戦は補給のため艦に戻る。南雲長官が攻撃隊には零戦の護衛を付けるよう命じたため、攻撃隊は零戦の補給が終るのを待つ。上空はがら空きだ。作業は大急ぎで進められた。上空の積乱雲に紛れて米攻撃隊のドーントレス急降下爆撃機が迫りつつあることに誰も気が付かなかった。

作業が済んだ。零戦の一機目が発艦した。その時だった。ドーントレスが高空から空母めがけてまっしぐらに急降下してきたのだ。甲板に爆弾が直撃する。ドーントレスの搭載していた爆弾程度の威力で空母に致命傷を与えることは難しい。しかし燃料と魚雷を積んだ発進間際の飛行機が艦内に満載されていた。誘爆で艦内は火炎地獄と化す。上部構造物が残らず吹飛んだ。空母赤城、加賀、蒼龍が撃破された。残った飛龍は空母ヨークタウンを撃破したが、再び急降下爆撃機に襲われ沈没した。日本は完敗した。後5分間あれば全機発進できていたのにと後世の史家は嘆息した。これが正史である。

ミッドウェイへと向う空母赤城の艦内に布で覆い隠された機体があった。極秘の実験機である。実戦試験の為に持ってこられたのだが、米軍に情報が洩れることを心配した司令部は出撃条件を限定していた。敵機の全滅が可能なときだけに出撃させるというのだ。まずありえない条件である。それほどまでに重要な秘密をこの機体は持っていた。

日本技術部は北極海周りで到着したUボートからジェットエンジンを手に入れたのである。ジェットエンジンを使えば連合軍の如何なる戦闘機も追い付けない高速度が可能だ。制空権は日本のものとなる。総力を上げてのジェット戦闘機開発が決定した。

まず先尾翼式の機体が造られた。プロペラを使った飛行実験では時速730キロという良好な結果が得られた。次には不完全ながらも一応の完成を見たジェットエンジンに換装し、画期的な時速1,100キロでの飛行に成功した。この機体は震電と名付けられた。武装は対空・対地ロケット砲を搭載してあらゆる任務に対応する。だが、喜んで使う訳にはいかなかった。これほどの高性能を持つ震電の機体がもしもアメリカの手に渡ったら日本は確実に破滅するだろう。慎重に運用せねばならなかった。

作戦は開始された。時は破滅に向けて刻々と進んでいく。敵空母発見の報に南雲長官は装備変更を命じた。必死で作業中の空母群に雷撃機が突入してくる。ここで直撃を受ければ爆発炎上は免れない。航空参謀源田実中佐は震電の出撃を進言した。

◆推奨機体　震電

雷撃機の編隊が赤城に接近している。

●雷撃機の編隊を壊滅せよ。

運命の５分間がやってきた。

●急降下爆撃機を迎撃せよ。

当初の計画通りミッドウェイ島攻略が開始された。

●ミッドウェイ島を攻撃せよ。

ミッション3　月と星の下に

1950年６月、韓国と朝鮮民主主義人民共和国との間に戦端が開かれた。いわゆる朝鮮戦争である。

この戦争からジェット機同士の戦いが始まった。共産主義陣営は MiG-15戦闘機を、自由主義陣営は主に F-86戦闘機を使用した。武装は共に機銃のみであった。この時代にはまだ誘導ミサイルが存在しなかったからだ。

この当時アメリカは B-29で爆撃を行っていた。大戦中は高高度を我が物顔に飛んでいた B-29であったが、MiG-15は高高度への上昇を軽々とこなす。そこでアメリカは F-84で B-29を護衛することにした。しかし、いざ実戦になってみると、F-84は MiG-15に及ばないと判明してしまった。F-84では突進してくる MiG-15を阻止できず、B-29は撃墜されていった。

このためアメリカ軍の主役は F-86になった。この戦争時の空戦では敵味方数十機が入り乱れて戦った。このような混戦の中でも F-84はほとんど戦果を上げられなかったが、F-86は MiG-15と対等以上に戦えた。撃墜率はやがて20対１以上にまで達した。

だが共産側も黙ってはいなかった。MiG-15bis が登場したのである。これは MiG-15のエンジンをより強力なものに換装して戦闘能力を向上させた改良型である。その結果 B-29の被害がたちまち増加した。負けじと F-86も全可動尾翼を装備した新型が朝鮮半島にやってきた。激しい空戦が繰り広げられ、ついに新型 F-86が MiG-15bis を圧倒した・・・

1953年、戦争は終った。しかしこの戦争を皮切りとするジェット機のエアーコンバットは互いの性能を上昇させながら果てしなく続いていくのである。

◆推奨機体　F-86、MiG-15

MiG-15の基地が B-29部隊の鉄橋攻撃をキャッチした。

●鉄橋攻撃部隊を MiG－15で迎撃せよ。

MiG-15の基地に大編隊が攻撃をかけてきた。

● **MiG-15で基地を防衛せよ。**

実験的にロケット砲を装備した型のF-86がMiG-15の基地攻撃に出撃した。

● **F-86でMiG-15基地の滑走路を攻撃せよ。**

ミッション4　轟雷作戦

1964年８月、トンキン湾で北ベトナム軍の魚雷艇と米駆逐艦が交戦したのを口火として、ベトナム戦争が始まった。

この当時のアメリカでは、戦闘機による格闘戦の時代は終了したと考えられていた。誘導ミサイルを搭載した航空機は、攻撃を受ける危険のないはるか遠距離から、安全に敵を仕留めるはずだった。この理論に従って設計された米軍の最新鋭戦闘機F-４ファントムには機銃が装備されていなかった。

1965年から米軍の航空攻撃計画、ローリング・サンダー作戦が始まった。米軍は北ベトナムを爆撃する際、攻撃機の護衛にF-100戦闘機を使用していた。北ベトナム軍はその迎撃にあたって奇襲戦術を多用した。鈍速なF-100は、いきなり襲いかかってくるMiG-17に対処できなかった。米軍は自慢の新型機F-４をベトナムに配備した。

北ベトナム軍は、MiG-15とMiG-17戦闘機を所有していた。両機共すでに旧式であり、主兵装は機銃だった。米軍の理論通りであれば、F-４には格好の獲物となる。

F-４は中射程レーダー誘導ミサイルのスパローと短射程熱源追尾ミサイルのサイドワインダーを装備していた。だが、「攻撃開始は目標を視認してから」との規則があった米軍にはスパローを撃つ機会があまりなかった。サイドワインダーも敵機の後を取ってから撃たないと熱源であるエンジンを捉えられないが、MiGはF-４よりも旋回性に優れており、その後ろを取るのは困難だった。ミサイルは理論ほど万能ではなかったのだ。そのうえ、ミサイルの有効射程より短い距離で近接空中戦に入ることも多く、そうなると機銃を持たないF-４では手も足も出なかった。

救いは相手が亜音速でしか飛べない旧式機ということだった。だが1965年北ベトナム軍にMiG-21が配備された。マッハ2級戦闘機の登場である。MiG-21は機銃とアトール熱源追尾ミサイルを装備し、F-４よりも高い格闘性能を持つ強敵であった。

米軍は懸命に対応した。本国には海軍戦闘兵器学校が造られた。そこでは仮想敵機との格闘戦が行われ、米軍パイロットの技量を大きく向上させた。F-４にも改良が施された。機銃ポッドとレーダー計算照準装置が装備された。優秀なパイロットと強力な戦闘機で、米軍はMiG-21と互角以上に戦えるようになった。

F-４の敵は地上にもいた。北ベトナム軍はSA-２ガイドラインミサイルシステムの陣地を多数構築していた。SA-２はMiG-21よりも巨大なサイズのレーダー誘導式ミサイルで、100m以上離れた距離で爆発しても損傷を与えるほどの破壊力を有している。米軍は、SA-２が発射されたら即回避運動に入って振切るという戦術で対抗した。またSA-２の攻撃を専門とする部隊アイアンハンドが編成され、多大な戦果を上げた。

1968年にローリング・サンダー作戦は終了した。この作戦での米軍と北ベトナム軍の最終的な撃墜／損失比は2.2対１であった。

◆推奨機体　F-4、MiG-21

初級

米軍はSA-2陣地を攻撃して空の脅威を取り除こうと画策した。ただしソビエトを刺激しないように全面攻撃は禁止された。地上のMiGを攻撃してはならないのだ。

● **F-4でSA-2のレーダーサイトを破壊せよ。多数配置されているダミーのレーダーサイトに惑わされないこと。MiGが出現した場合に空中で交戦するのは問題ないが、滑走路への攻撃は禁止である。**

中級

SA-2陣地への第二次攻撃が行われることになった。だが北ベトナム軍は新たにMiG-21を配備していた。

● **F-4でSA-2陣地を攻撃し、さらに新鋭MiG-21部隊を撃滅せよ。滑走路への攻撃は禁止である。**

上級

ベトナム戦争は激化していき、ついに米軍は全面攻撃を許可した。空中であろうと地上であろうとMiGを破壊してかまわないのだ。

● **MiG-21で米軍攻撃隊を迎撃せよ。**

◎アドバイス

このミッションではミサイルにECMが通用しない。自機に向って飛んでくるミサイルを発見したら確実に回避運動で避けないと撃墜されてしまうだろう。

ミッション5　鋼鉄の砂塵

1960年代、イスラエルは自国の４倍以上の航空兵力を敵に回していた。イスラエルの主力戦闘機はミラージュIIIで、敵の主力はMiG-21だった。さほど性能は違わない。イスラエルは人の力で劣勢を補うしかなかった。

航空機のパイロットは貴重な存在である。逆に言えばパイロットの養成は非常に難しい。一人前のパイロットを送り出すには莫大な金と手間が必要なのだ。イスラエルはそのシステムを造り上げた。パイロットは18歳で入隊し、過酷な授業を受けた。近接戦闘を重く見たイスラエルは、米軍のトップガンと同じく仮想敵機との模擬空中戦を行い格闘戦技術を磨いた。やがて世界最高水準の部隊がイスラエルに誕生した。

イスラエル軍はその能力を活かすべく、作戦を開始した。

1967年６月５日の早朝、イスラエルから大部隊が出撃した。レーダー波を避けるため、どの機も低空を飛行した。敵基地10箇所がほぼ同時に攻撃された。少数のMiGが緊急離陸したが、大半は地上で機銃掃射を浴びて破壊された。滑走路には爆弾が降りそそいだ。奇襲は成功した。

攻撃は第二波、第三波と続いた。４倍以上いたはずの航空兵力も奇襲と各個撃破、それにイスラエルパイロットの技量で破壊されていった。開戦当日で実に300機以上が撃破された。

二日目以後のイスラエル空軍は主に地上部隊の護衛が任務となった。襲いかかってきたMiGはイスラエル機に一矢も報いることなく撃墜されてしまったという。

戦争は６日目に終った。撃墜／損失比は5.8対１であり、イスラエルパイロットはその実力を証明したのである。

◆推奨機体　ミラージュIII

ミラージュ部隊は奇襲攻撃に出撃した。

●敵航空基地を奇襲し地上の敵機を破壊せよ。基地滑走路は破壊しなくてもよい。

第一次攻撃に成功したミラージュ部隊は第二次攻撃に出撃した。

●敵航空基地を奇襲し地上の敵機と滑走路を破壊せよ。

都市攻撃に向っているらしいTu-16爆撃機部隊をイスラエル軍のレーダーが捉えた。

●敵残存兵力を壊滅せよ。

ミッション6　フォークランドは僕らの島だ

垂直離着陸能力（VTOL）は戦闘機の夢である。

VTOL は戦闘機の活動範囲を驚異的に拡大する。広大な土地を必要とする滑走路は敵に所在を隠すのが難しい。攻撃に対しても脆弱である。だが滑走路がなくとも VTOL 機は活動できる。

戦闘時にも VTOL は強力な武器になる。静止や後進などの機動を VTOL 機はこなす。通常機とは次元が違うほどの格闘戦能力だ。

この VTOL を手に入れようと各国は研究した。しかし戦闘機レベルで実現するのは極度に困難だった。

サイズとスピードを限定しなければ VTOL はそう難しくない。ヘリコプターに近づければ容易に完成した。ところが戦闘機では高速性が要求される。サイズも二人乗りが限度となる。各国は実験に失敗を繰り返し、ついには VTOL 機研究から脱落していった。アメリカさえもがあきらめた。西側ではイギリスだけが最後まで残った。そしてついにイギリスは VTOL 戦闘機を完成した。ブリティッシュエアロスペース・ハリアーである。

1982年アルゼンチン軍はフォークランド諸島を占領した。イギリスは島を奪回すべく機動部隊を派遣した。英空母の艦載機は実戦初参加のハリアーだった。理論が実戦で崩されさることは多い。ハリアーに試練の時が来た。本当に VTOL は強力なのだろうか。

アルゼンチン軍は英機動部隊に激しい航空攻撃を加えた。ハリアーが迎撃し、アルゼンチン軍の戦闘機ミラージュIIIと交戦した。ミラージュIIIはハリアーの後を取ろうとしたが、ハリアーは急減速してたちまちアルゼンチン軍パイロットの視界から消え失せ、そしてミラージュIIIに一撃を見舞った。初戦闘をハリアーは勝利で飾った。

アルゼンチン軍は奥の手を使った。シュペル・エタンダール攻撃機の搭載するエグゾゼ対艦ミサイルだ。ハリアーは数不足で機動部隊全体をカバーできない。英機動部隊はシュペル・エタンダールの突入を阻止できず、エグゾゼが駆逐艦シェフィールドを一撃で撃沈した。恐るべき威力だった。しかしアルゼンチン軍は総数５発しかエグゾゼを所有していなかったため、戦局を左右するにはいたらなかった。

度重なる交戦の中、ハリアーは一方的にアルゼンチン機を撃墜していった。ハリアーの相手になる戦闘機はいなかった。ハリアーに遭遇した敵機は一目散に逃走しようとしたが、ほとんどは逃げ切れず海の藻屑となった。

この戦いにおけるイギリスとアルゼンチンの撃墜／損失比は20対０、ハリアーの完勝であった。ハリアーは VTOL の威力を実証したのである。

◆推奨機体　ミラージュIII、シュペル・エタンダール

フォークランド諸島への海域を封鎖している英艦隊にアルゼンチン軍は本土から攻撃を仕掛けた。

●シュペル・エタンダールを僚機としてミラージュIIIで出撃し、英艦隊を攻撃せよ。

英艦隊はフォークランド諸島へアルゼンチン占領部隊制圧に向った。

●シュペル・エタンダールを僚機としてミラージュIIIで出撃し、英艦隊を攻撃せよ。

アルゼンチン軍は英空母を攻撃可能圏内に捉えた。

●シュペル・エタンダールを僚機としてミラージュIIIで出撃し、英空母を攻撃せよ。

ミッション7　A-10ラストミッション

重装甲、高機動性、大火力を誇るA-10サンダーボルトII。近接支援に能力を絞ることで実現した性能は戦車相手に凄じい威力を発揮する。しかし近接支援専用のA-10には空戦能力がなく、完全に制空権を握っている戦場でしか活動できない。結局A-10は対戦車ヘリに置き換えられていった。

A-10の引退も時間の問題になった頃のことである。軍事国家が小国を占領するという事件が起きた。その小国は重要な資源を産出する戦略地域だった。資源の安定供給の為に、先進諸国は部隊を緊急派遣した。

軍事国家への撤退要求は拒絶された。各国は、実力による軍事国家排除を決議した。

小国を占領している軍事国家の軍団は戦車を中核とした機甲師団であった。航空兵力は極めて貧弱であり、制空権は先進諸国が確保した。これはまさしくA-10のための戦場だった。

軍事評論家はA-10が出撃しても撃ち落とされるだけだと批判した。電子防御設備が脆弱な上に行動が鈍速で、対空砲火を避けられないというのである。それでもA-10は最後の戦場へと赴いていった。

出撃したA-10は激しい対空砲火で歓迎された。軍事評論家が言った通り、確かにどのA-10も被弾した。だがA-10は被弾をものともしなかった。エンジンの片方を吹飛ばされてすらA-10は飛行し、生還したのである。

そしてA-10の大口径アベンジャー機関砲が猛威を振るった。戦車の重装甲もアベンジャーの前には無力だった。A-10が通り過ぎた後には鉄屑しか残らなかった。ヘリを空中戦で撃墜するということまであった。まさに大活躍だった。

こうしてA-10の悪評価は撤回された。最初で最後の戦いは、A-10に栄光の戦歴を与えた。

◆推奨機体　A-10

軍事国家が小国に侵攻し、首都を占領した。

●敵地上部隊を首都から一掃せよ。

首都での戦いに敗北した軍事国家は本国へと撤退を開始した。

●撤退する敵地上部隊を叩け。

軍事国家は大部隊を終結させて司令センターの守りを固めた。

●敵戦力を奪いつくし、軍事国家を崩壊させよ。

◎アドバイス

このミッションではミサイルにECMが通用しない。自機に向って飛んでくるミサイルを発見したら確実に回避運動で避けないと撃墜されてしまうだろう。

ミッション8　陽はまた昇る

まもなく世紀が変ろうとしている頃のことだった。

日米関係は最悪だった。アメリカ経済は瀕死の状態で、反対に東アジアは活気に満ちていた。いまやアメリカの日本叩きは東アジア叩きにまで拡大していた。

アメリカは東アジアとの経済戦争を宣言し、北米大陸連合《N. A. A》を結成した。だがアメリカの経済状態は、回復するどころか一層悪化した。もはや東アジア抜きでは経済活動が成立しなかったのだ。その上それまで意見が一致しなかった東アジア諸国を団結させてしまった。東アジア諸国はアジア経済連合《AEN》を発足させたのである。

日本、韓国、台湾、香港を中心としたAENは、東南アジア諸国の加盟で一大経済圏を形成するに至った。ただしフィリピンは加盟していなかった。フィリピンはアメリカとの緊密な同盟下にあった。

フィリピン国内ではAEN派とN. A. A派が対立していた。アジアにありながらAENに加盟しないことは近隣諸国との関係を損った。だがアメリカとの長い友好を裏切るのにも抵抗があった。決着は総選挙で付けられることになり、言葉だけでなく実力も駆使してのはげしい争いの末にAEN派が勝利した。

フィリピンはアジアにおけるアメリカの最後の砦だった。フィリピンを失えばアメリカはアジアに力を及ぼせなくなる。アメリカはフィリピンの暴動鎮圧を名目に艦隊を出動させた。

フィリピンの親AEN派政権はAENに救援を依頼した。アメリカの野望をくいとめるべく、新造潜水空母が、艦載型に改造したFSXを載せて呉港を出撃した。ここに第二次太平洋戦争が始まった。

◆推奨機体　FSX

アメリカ艦隊のイージス艦数隻が九州南方の海上に確認された。日本付近の監視が目的らしい。AENの潜水空母は至近距離まで接近し海中からFSXを発進させた。

●イージス艦を撃沈せよ。

アメリカ艦隊はフィリピンから日本に目標を変更した。空母ニミッツを中心とした機動部隊が九州南方の海上に現われた。潜水空母は空母輪形陣の内側に FSX を射出した。

●アメリカ機動部隊を壊滅せよ。

大部を失ったアメリカ艦隊は残った艦で沖縄に突入する作戦を立てた。潜水空母は全面対決をすべく、アメリカ艦隊の行く手に浮上した。九州南西海上で最終戦闘の火蓋が切られた。

●アメリカ艦隊を壊滅せよ。

収録機体解説

●グラマン F-14トムキャット

F-14は艦隊防空用の戦闘機である。地上攻撃が主担当のF/A-18戦闘攻撃機とコンビを組んで、世界の海を転戦している。F-14を運用している国はアメリカだけだが、正規空母の機動部隊を持つ国が他にはほとんど存在しないことを思えば当然だろう。

F-14は可変翼をコンピュータで制御し自動的に最適の翼状態を保って飛ぶ。この機構で得られる高機動力は格闘戦時に威力を発揮する。しかし遠距離からの狙撃こそがF-14の本領である。

F-14専用のフェニックス長射程空対空ミサイルは、200kmの彼方から敵機を狙い撃つ。フェニックスはスタンドオフ（撃ちっ放し）型のミサイルで、発射後はF-14自体のコントロールを一切必要とせず、自力で敵機を追跡する。

このように強力なフェニックスだが、実際にはアメリカ機動部隊を今まで誰も襲撃しなかったので、実戦能力は定かでない。しかし今まで襲撃されなかったという事実がF-14とフェニックスの秀でた戦闘能力を明らかにしているとも言えるだろう。

●マクダネルダグラス F-15E ストライクイーグル

1967年のモスクワ航空ショーに登場したMig-23、Mig-25などの高性能戦闘機を打ち破るためにF-15イーグルは開発された。

軽く頑丈なチタニウム合金と双発エンジンの大推力で、F-15はエンジン推力が機体重量を上回るほどの大加速力を得ている。これは高機動力と大搭載量につながる。高性能レーダーを装備して、攻撃能力も極めて高い。

対地、制空両方の任務をこなす戦闘機ETCの開発計画にはF-15イーグルの改造型が採用され、F-15E ストライクイーグルと名付けられた。万能を目指したプロジェクトはおおむね失敗するが、数少ない成功例の一つがストライクイーグルである。

●ロッキード/ボーイング/ジェネラルダイナミクス YF-22A

F-15の後継機となる戦闘機ATF（発達型戦術戦闘機）はYF-22AとYF-23Aが候補であったが、格闘能力に優れたYF-22Aが選定されることになった。

超音速で敵地に侵入し、相手のレーダーに映る前にミサイルを発射して、敵がこちら

に気付いた頃には攻撃圏内から逃走している、というのが ATF の基本戦術だ。この戦術を実行するには超音速巡航とステルスの能力が不可欠となる。YF-22A はこの要求を満たしている他に、コンピュータ制御で並外れた機動力を実現している。予想外の至近距離戦闘が多発したベトナムでの経験を戦訓としているのだろう。

F-15を使用している陸空軍だけでなく海軍も ATF の導入を希望しているので、F-14の後も YF-22A が継ぐこととなろう。

●ミコヤン・グレビッチ MiG-25"フォックスバット"

アメリカが開発していた B-70戦略爆撃機はマッハ3という超高速性能を持つはずだった。マッハ3級機を迎撃するにはマッハ3級機が必要だ。こうして MiG-25が出現した。

MiG-25は世界最高速のジェット戦闘機だ。最高速度は時速3,000kmで、この高速を実現する代償に旋回性能は低く抑えられ、最高速度では旋回半径が数kmにもなる。格闘戦はまず無理だろう。

機体の造りは如何にもソビエトらしい無骨さだ。超音速飛行時に発生する高熱に耐えるため、機体は鋼鉄製だ。原爆がまき散らす強烈な電磁パルスを受けても大丈夫なように、電子回路は真空管で構成されている。

B-70がキャンセルされてしまった今、本来の敵はいなくなったが、MiG-25は迎撃・偵察用として今でも世界各国で任務に就いている。

●スホーイ Su-27k"フランカー"

Su-27はスホーイ設計局製の大型長距離戦闘機だ。中央航空流体力学研究所が決定したデザインをミコヤン・グレビッチ設計局が仕上げたら MiG-29で、スホーイ設計局が手掛けたら Su-27になった。

スホーイ設計局は伝統的に大型の機体を担当してきたが、この Su-27も面積比で MiG-29の2倍という大きさだ。巨体に負けないだけの大推力エンジンと優れた機体設計で、機動力は西側現用機のどれにも勝る。F-15が持っていた上昇記録も Su-27の改造機に破られてしまった。

レーダーは240kmの捜索能力を持ち、この点では西側最高の F-14以上だ。しかしコンピュータ部分は貧弱で目標の同時追跡が出来ないなど西側では10年前の水準にすぎない。

近年正規空母クズネツォフが就航したが、この空母に搭載する用途で海軍型フランカーが新たに開発された。海軍型はカナード翼が追加され、Su-27k と呼ばれている。

●スホーイ Su-37

スホーイ設計局が計画中の多用途戦闘機 Su-37は、今のところ模型が存在するのみの機体だ。

Su-37は F-18の汎用性に F-15の大パワー、F-14の空戦能力と F-16の簡素さを目指している。

F-16にならってか Su-37は超大推力エンジンを単発で使用する。機体形状はカナード翼と主翼の組合せ方がスウェーデン機の造りとよく似ている。短距離離着陸用のスラスト・リバーサを装備しているとの説もあるが、そうなると一層スウェーデン機に近くなる。固定基地に拠らないスウェーデン機的運用思想で設計されているのかもしれない。

Su-37の実機がいつ完成するかだが、Su-37の設計計画は非公式で予算が付いていない。へたをすれば計画が立消えることもありえ、その場合 Su-37は幻の戦闘機として終るだろう。

●九州飛行機　十八試局地戦闘機“震電”

第二次世界大戦中に造られた前翼式戦闘機で実用的な性能に達したのは震電のみである。

前翼式とは、主翼が後部、尾翼が前部に位置している機体形状だ。プロペラも機体の最高尾にあって、脱出時にはパイロットが巻き込まれないようプロペラを火薬で吹飛ばす設計だった。

空気抵抗の低い前翼式は最高速度750kmが可能と推測され、さらにはジェットエンジンへの換装も考えられていた。

しかし試験飛行を3回した時点で日本が降伏し、震電は実戦で試されることなく終った。

本シナリオ集ではプロペラをジェットエンジンに換装し、また迎撃機から艦上攻撃機に機種を変更した。武装も機銃を無誘導ロケット砲に変更している。まず敵を射線上に捉え約1,000m 以内に近づいたら射撃する、というのが無誘導ロケット砲の撃ち方だ。命中率は低いが、一発の威力は機銃弾よりも大きい。リアリティはほとんどないが、日本海軍が夢見た理想の機体だと思ってほしい。

●ミコヤン・グレビッチ MiG-15“ファゴット”

ソビエトが開発した最初の実用的ジェット戦闘機が MiG-15だ。

MiG-15は朝鮮戦争でデビューした。初めてまともなジェット戦闘機を相手にした米軍は、いわゆるミグ・ショックを受けた。MiG-15は米軍最新の戦闘機にも劣らない一流の

性能を持っていたのだ。MiG の華々しい戦歴は、この戦いから始まった。
ジェットエンジンに翼とコックピットを取り付けたら MiG-15のデザインだ。このシンプルな機体形状はいささかユーモラスで、大きく口を開けた空気取入れ口が鯉昇りを思わせる。
大戦末期のドイツ機フォッケウルフ Ta-183を参考に MiG-15は設計された。しかし当時のソビエトにはまともなジェットエンジンの開発能力がなかった。運の良いことにイギリスがロールスロイス・ターボジェットエンジンの輸出を許可してくれ、ソビエトは早速コピー生産して MiG-15を完成させた。
すでに初飛行から半世紀が過ぎようとしているが、MiG-15は今でも練習機として空に残っている。

●ノースアメリカン F-86セイバー

F-86は MiG-15の脅威に立ち向かった昼間戦闘機だ。
F-86の出現は MiG-15より２年遅れである。単発で後退翼の構成自体は MiG-15と変らないが、スマートなデザインが MiG-15よりもずっと洗練された印象を与える。
朝鮮戦争で F-86は強敵 MiG-15に遭遇した。MiG-15よりも全般的に性能は低かったが、米軍パイロットは充分に戦闘経験を積んでいたので、やられるのは普通 MiG-15の方だった。度々改良設計され、朝鮮戦争の後期に登場した F-86F は上昇性能を除けば MiG-15を越えるに至った。全可動尾翼と高性能 J-47-GE27エンジンが F-86F のパワーの秘密だった。
F-86はアメリカの同盟国に広く使われた。日本では300機を越える数の F-86が1970年代後半まで空を飾っていたのである。

●F－4ファントム

西側世界のベストセラー機 F-４は今までに5,000機以上が生産され、現在も現役で活躍している。
F-４は全天候艦上戦闘機を目指して開発され、その高性能から艦上のみならず陸上機としても使用されるようになった。
当初の型はミサイルしか対空装備を積んでいなかったためベトナムで MiG-21に苦戦し、E 型からは機銃を装備するようになった。E 型はエンジンや機体形状、電子兵装も改良してあり、F-４シリーズ中では最も多く生産された。
搭載量の多さ、優れた空力性能が F-４の人気の理由と思われる。生産開始から30年を経たが、機体の優秀さは未だに色褪せていないほどだ。近代化改修を施せば新型機にもひけを取らない攻撃能力が期待できる。

F-4は今後も一線で活躍していく機体である。

●ミコヤン・グレビッチMiG-21"フィッシュベッド"

MiG-21は世界中で最も多く生産された戦闘機である。生産総数は実に8,000機以上にも上る。

初心者にも乗りやすく、熟練度が低い中小国の空軍でも安心して導入できたこと、簡素な構造で整備がたやすく価格も低いこと、機動性が高かったこと、などが、人気の理由だろう。

ベトナム戦争では重戦闘機F-4ファントムと対等に戦い、ミサイル一辺倒だったF-4を次々に機銃で撃墜してアメリカ空軍を慌てさせた。

ソビエトではMiG-29に後を継がせて引退したが、中小国では今も主力戦闘機として使われている。おそらく21世紀に入っても空を飛び続けているだろう。

●ダッソーブレゲー　ミラージュIII

第三世界で多く使われているフランス製小型戦闘機がミラージュIIIだ。

ミラージュIIIは主翼と尾翼をまとめたデルタ翼を持っている。デルタ翼は翼面積を広げ搭載量の増加をもたらしているが、機動性が低いという欠点もある。

1960年から飛んでいる老兵だけあって実戦経験は豊富で、これまで中東戦争やフォークランド紛争などの戦いに参加し確かな評価を得てきた。改修キットで近代化され、現在も一線級機として使われている。

イスラエルが保有するクフィルはミラージュIIIのコピー機体で、エンジンがより強力なものに換装されている。

●ダッソーブレゲー　シュペルエタンダール

旧式化したエタンダールIV艦上攻撃機を再設計して戦闘攻撃機としたのがシュペルエタンダールだ。

艦隊防空機としても一応使用されているが空戦能力は期待できない。本領は対艦攻撃で、エグゾゼ対艦ミサイルを一発搭載する。

シュペルエタンダールとエグゾゼの組み合せはフォークランド紛争で名を売った。フォークランド紛争は初めて対艦ミサイルが使われた戦いで、その威力をエグゾゼは見せつけた。駆逐艦シェフィールドやコンテナ船アトランティック・コンベヤーが、その餌食となった。

そのシュペルエタンダールも今や完全に時代遅れとなり、ラファールへの転換が進んでいる。

●フェアチャイルド A-10サンダーボルトII

米軍唯一の近接支援専用機 A-10は、最前線で陸上部隊の攻撃を支援するのが役目だ。激しい対空砲火にさらされる最前線で活動することから機体は極めて強靱で、被弾しても全体の機能が停止しないよう各機構は余裕を持った造りになっている。例えばエンジンの片発が止まっても飛行を継続できる。20mm弾に対してなら生存率は F-15の10倍以上だ。

敵車両攻撃時には現用機最大のアベンジャー30mmガトリング機関砲が火を吹く。
A-10はアベンジャーを連続して撃てない。あまりのハイパワーに反動が凄じく、A-10が失速しかねないからだ。

このように高い戦闘能力を誇る A-10だが、米軍の航空作戦理論の変化によって近接支援専用機は不必要とされてしまった。将来的には戦闘攻撃機やヘリコプターに置き換えられて姿を消す運命にある。

● FSX

自衛隊は専守防衛を旨としているので「攻撃」という言葉を用いない。だから自衛隊は攻撃機のことを支援戦闘機と呼んでいる。現在使われている支援戦闘機は三菱 F 1 だが既に旧式化している。そこで現在進んでいる次期支援戦闘機導入計画が FSX だ。

FSX は国内開発する予定だったがアメリカの要求で共同開発が決定した。F-16を基にして、フェイズド・アレイ・レーダーの採用、主翼の大型化で対艦ミサイル4発を搭載、エンジン推力の上昇、などが行われる予定である。しかし共同開発計画は日米の意見が合わず遅滞する一方だ。

機体が就役するだろう10年後には時代遅れになっている可能性が高い。

【ご注意】

1)このプログラムおよびマニュアルの内容の一部または全部を、無断で複製することは、法律により禁止されています。

2)このプログラムは、個人として使用するほかは、著作権法上、株式会社システムソフトに無断で使用することはできません。

3) この製品の仕様は将来予告なしに変更することがあります。

4)内容には万全を期して作成しておりますが、万一ご不審な点、誤り、記載もれなどお気づきの点がありましたらご連絡ください。

5)運用した結果については、4項にかかわらず責任を負いかねますのでご了承ください。

商品に関する技術的なお問い合せは・・・
ユーザーサポート専用電話　Tel 092-752-5278
月～金　9：00～12：00・13：00～17：00　（祝祭日を除く）

1992年3月　初版発行